

# 40人のメンバーたちが集結。 絵本をアニメに。 『戦争のつくりかた』



04年に出版された絵本『戦争のつくりかた』(※)は、日本が再び「戦争のできる国」へ変貌していく過程を描いた物語。安保法制で揺れた今年、この絵本がアニメーション作品として生まれ変わった。

※絵本は公式サイトで公開 <http://sensukujimdo.com/>

2001年、米国で発生した9・11テロの後、アフガニスタン、イラクで戦争が始まり、日本でも戦争に備えるという名目で「有事法制」が04年に成立した。そんな最中、「今まで戦争をしてこなかった私たちの国が、その『かたち』や『ありよう』を大きく変えようとしている——」と危機感をもった市民たちが、絵本『戦争のつくりかた』を制作。静かな話題を集めた。

それから11年。安保法制をめぐる議論の中で再び注目を集めたこの絵本が、アニメーション作品として映像化された。プロジェクトを進めたのは、複数の映像作家で結成された「NOddIN」。発起人の一人である丹下紘希さんは「絵本を制作したメンバーの一人とフェイスブックを通じて知り合ったことがきっかけになりました」と話す。その後、改めて『戦争のつくりかた』を読んだ丹下さんは、物語の内容に心を動かされ、昨年9月の国際平和映像祭で絵本を朗読する機会をもった。

「そこで朗読しているうちに『この物語は映像に変換できるのではないか』とひらめいたんです。絵本で描かれている、戦争に向かうプロセスは、歴史上、何度も繰り返されてきたもの。でも我々は

それに学ばず、客観的に認識できていないのではないかと。たとえば自衛隊が武器を持つて、よその国に出かけられるようになった。ことも、絵本や映像にすることで自分たちの身近に考えることができる気がしてきました」

映像化のアイデアを絵本の制作メンバーに相談すると、他の制作者からも映像化の許可をもらうことができた。しかし、基本が自主制作であったため、費用、制作時間など、さまざまな問題が起り、制作は困難を極めたという。

プロジェクトの総合監督である関根光才さんは「映像業界では戦争反対」とか「原発反対」といったことに対して声をあげる人が少ないんです。なぜかという、映像やテレビの仕事は原発とかかわっている企業がクライアントだったりするため、政治的な発言はしづらいという雰囲気がある。そういう事情から声をかけても断られることが多いですね」と振り返る。

それでも賛同してくれるメンバーが40人ほど集まった。制作スタイルは、ちよつと変わってある。一人の監督をたてるのではなく、絵本の言葉をパート分けして、それぞれの作家が約15秒の作品をつくり、リレー方式

で場面をつないでいくというものの。

制作途中の作品を見せてもらった。手描きのイラストから、布や糸を使ったもので、作家ごとに絵もテイストも違うのに、不思議と一つの作品としての統一感がある。映像に乗せて、音楽と英語のナレーションが入り日本語の字幕がつくという、丁寧でしゃれたつくりだ。

「実写で戦争のことを映像化すると、あまりにも生々しいものになってしまふ。アニメーションならば、観る人の想像力をかきたて、それぞれの感性にしたがって受けとってもらえると思った」と丹下さん。

アニメ化によってこの物語がさらに広がってほしい。

⑤ (石井綾子)

作品画像

©『戦争のつくりかた』アニメーションプロジェクト



左から、丹下紘希さん、関根光才さん  
Photo: 横関一浩

## NOddIN

東日本大震災、福島原発事故後、映像作家たちが集まり結成。逆から読むと「NIPPON」という名前には、3・11を経て「今までとは違った視点を持って生きていきたい」という思いが込められている。 <http://noddin.jp/>

